BUNGEI OG NETWORK TSUSHIN

文芸OGネットワーク通信

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1
共立女子大学文芸学部劇芸術研究室内　文芸OGネットワーク
URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei
代表 多田 久惠　発行：2020.3.28

vol.32

共立祭 開催

令和元年の共立祭は、10月19日(土)、20日(日) の2日間にわたって開催された。

テーマは「百花斉放」で、共立祭に携わる全ての人が、自由に本領を発揮して、一人ひとりが活発に活動できるようにとの思いが込められているそうだ。

文芸OGネットは今年度は共立祭には不参加ということになった。残念なことではあるが、準備等の事を考えると仕方のないことなのかもしれない。

今回は本館と2号館のみの開催だったので、会場は少し寂しい気もしたが、各サークルの頑張りには熱いものを感じた。中でもアイドル研究会のメンバーは、服装、ダンス、歌とまさに芸能界のアイドル。女子学生だけでなく、彼女たちと共に踊り、歌うたくさんの親衛隊（男子ファン）がいたことに驚かされた。私たちの年代には考えられないことである。撮影禁止だったのが残念である。

進学説明会も行われていたので、見学を兼ねた親子連れも多く見受けられた。例年のように全国支部の物産展も行われ、手作り品や各地方の珍しい物が販売されていてとても賑やかであった。そのほかに、ゼミの研究発表、各サークルの発表、演奏会、演劇、バザー等の催しがあった。まさに一人ひとりが活発に活動している様子が伝わってきた。最後に茶道部でお茶を一服いただいた。

「ホームカミングデイ2019」開催

第3回目のホームカミングデイは、今年は共立祭の初日に合わせて10月19日（土)、共立女子大学3号館を会場にして講演会と懇親会が行われた。

◇講演会

会場：6階610講義室
時間：午後2時～3時
講師：桂　由美 氏
（ブライダルファッションデザイナー）
演題：「私と共立」

共立は第二のふるさとと話されるほど、共立卒業後も、共立と深く関わってこられた桂由美さんが、ブライダル専門のデザイナーを目指すきっかけとなったことや、パリに留学してデザインを勉強され、ブライダル関係の会社を起業されたことなど、講演では、その来し方を振り返り、折々の仕事などを、エピソードを交えながら語られた。

◇懇親会

全体懇親会は地下1階学生食堂で、家政学部児童学科懇親会は4階403講義室、看護学部全体懇親会は4階401講義室で、それぞれ午後3時から開かれた。

全体懇親会は、立食パーティー形式で行われ、卒業生、先生方などが思い思いに旧交を温める姿が見られた。

新舞踊運動(上)

文芸OGネットワーク初代代表の百瀬好子さんの卒業後の活躍については第1回の「共立spirit!」でお伝えしているのだが、70歳を機に入学された(ご本人に言わせると“古稀の手習い”)大学院修士課程では日本舞踊研究に励まれたそうである。そのご研究の一端をまとめていただいた。

「舞踊」という語は今では普通に使われていますが、歴史は浅く、約百年前に坪内逍遥の『新楽劇論』(明治37年)で初めて使用されました。逍遥が唱えた舞踊改革論は日本舞踊改革の烽火となり、舞踊という語は、これまでの歌舞伎を母体として成立、発展してきた所作事や踊り、舞という枠を越えて、より自由で、新しく、可能性と進展性をイメージさせることばとして当時の人々に受け取られました。逍遥の提唱は、劇作家長谷川時雨へと引き継がれ、六代目尾上菊五郎の応援を得て「舞踊研究会」を起こすことになります。

「舞踊研究会」は7回の発表会をもち、菊五郎、二世市川猿之助、七世坂東三津五郎、尾上梅雄(六世藤間勘十郎)など多くの歌舞伎役者が出演しています。続いて、時雨は菊五郎と提携して「狂言座」を創ります。創設趣意書に「新舞踊」を研究したい、という一項があり、歌舞伎の所作事にはない、新しい舞踊を射程に入れていることがわかります。

ふり返れば、江戸から明治にかけて、舞踊は歌舞伎役者専用のものでした。明治末、逍遥によって蒔かれた舞踊改革の種は、時雨や菊五郎によって育てられ、大正時代に大きな花が開くことになります。その主な担い手は、花柳界出身の踊り手でした。やがてこの運動は舞踊界を巻き込み、歌舞伎や演劇、音楽、美術界にまで波及して、新しい舞台芸術を目指して展開していくことになります。日本舞踊史のなかではそれを「新舞踊運動」といい、それによって生まれた作品を「新舞踊」と呼んでいます。明治の末から大正にかけての日本文化は近代化、西洋化を目指していました。新劇、新派が生まれ、宝塚少女歌劇が誕生し、西洋式劇場の開場があり、女優が誕生し、「青鞜社」の結成もありました。大正デモクラシーという時代の波に乗って女性が外に向かって発信できる環境が整ってきたのです。

稽古ごととしての踊りは、江戸時代中期以降盛んになります。当時、武士や町人の娘が御殿奉公や良縁を得るために、歌舞音曲の稽古をすることが流行しました。当然、踊りの師匠の需要が増えました。師匠は芸だけではなく、行儀作法も教える教育者でもあったのです。特に師匠の中には「お狂言師」と呼ばれて、大奥や大名の奥方に出向き、歌舞伎狂言や踊りを演じたり、奥女中に指南をする者もいました。一方花柳界においては、清元、常磐津、長唄、端唄などの音曲や踊りが芸者によって演じられ、伝承されていました。花柳界は芸能や芸能者を磨き育てるひとつの場でもあったのです。

新しい時代の流れと継承されてきた芸の系譜という、一見相反する二つの要素が「新舞踊運動」を開花させ、女性舞踊家を誕生させたのです。

百瀬好子(1960卒、2007院卒)

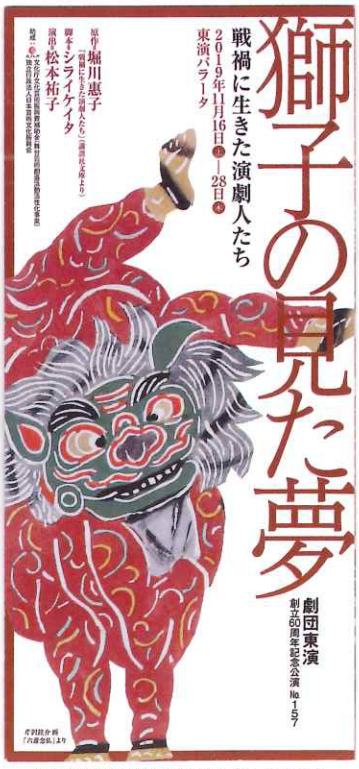
劇芸術資料室から　芝居を観に行くということ

去年の7月、『木の上の軍隊』を観に行った。沖縄を舞台にして戦争を描きたい、と言い続けながら2010年に他界した井上ひさしの遺志を、蓬莱竜太が完成させた舞台(2013)の再々演である。観劇後、席をたとうとして、隣席の人のハンドバッグのタグ「アベ政権キライです」が目に入った。作家澤地久枝氏が毎月3日、国会前でプラカードを持って立っている、という記事が目に浮かんだ。11月、劇団東演の『獅子の見た夢』を観る。堀川惠子氏のノンフィクション『戦禍に生きた演劇人たち―演出家・八田元夫と「桜隊」の悲劇』(講談社、2017)をシライケイタが脚色、松本祐子が演出した舞台である。

築地小劇場の丸山定夫や元宝塚の園井恵子らが所属した移動演劇隊「桜隊」が巡業中の広島で原爆にあい、9人全員が犠牲となったことは知っていた。しかし、「移動演劇隊桜隊原爆忌」法要が講演や朗読を含む形で毎年8月6日、目黒の五百羅漢寺で連綿と続いていたことは知らなかった。新藤兼人監督は映画『さくら隊散る』(1988)の冒頭でこの原爆忌慰霊法要を映している。日本の近現代演劇がご専門の阿部由香子先生は、授業で必ずこの映画を学生に見せていらっしゃるそうだ。

1943(昭和18)年生まれの私には戦争の記憶がない。戦争を描く芝居を観に行くだけではなく、身近な次の世代に伝えなければいけないことがあるはずだ、と反省させられた一年であった。

多田久惠(1970院卒)



劇団東演の『獅子の見た夢』のちらし

女性の自立と社会的地位向上をめざす建学精神のもと、創立133周年を迎えた共立女子学園。学び舎を巣立ったあと、仕事や家庭、地域など社会の様々なシーンで共立spiritを放っているOGを紹介していきます。

file 8 堀越みほ

Miho Horikoshi

現在、7歳と5歳の2人のお子さんの子育てをしながら、福音館書店・宣伝課に在籍し、本を通じた親子のコミュニケーションの提案やSNSでの情報発信、学校図書館の支援などに取り組まれている堀越みほさん(1997年英文学コース卒)。大学時代の思い出や仕事のやりがいなどを聞かせていただきました。

――まずは、大学生活で印象に残っている思い出を聞かせてください。

当時は高尾に校舎(八王子キャンパス)があり1・2年生の時は、杉並区にある学生寮で過ごしました。なんと1年生の時は4人部屋でした。部屋にはテレビはもちろん、コンセントもなくて、ドライヤーをかけるときなどは「電源部屋」のようなコンセントだけが並んだ部屋に行くという、今では信じられないような生活でしたが、学生寮で過ごした時間はとても楽しく、大学生活というとまずそこを思い出します。

――先生方との交流についても聞かせてもらえますか。

英文学コースでしたが、舞台鑑賞が好きだったので、劇芸術コースの研究室にもよく遊びに行っていました。鈴木国男先生や助手の方とお芝居の話をするのは楽しい時間でした。とにかく当時は、先生方の話を聴くのが楽しくて。

3年生の夏休み、ニューヨークに旅行した際、"Sunset Boulevard"という舞台の1シーンを見て舞台照明に興味を持ちました。この時ふと「照明の仕事をしてみたいな」と思いまして。

――進路は舞台関係に?

舞台装置系や興行系マスコミなどを狙って就職活動をし、舞台照明の会社に就職しました。大きな現場の多い会社で、様々な有名アーティストを近くで見られるのも楽しみの一つでした。照明の仕事は本番だけでなく、むしろ事前仕込みと撤収が大変で、帰宅できないことも多く、ハードでした。九段会館や武道館で仕事があった際は、ゼミの先生だった故・河本仲聖先生の部屋に寄り道をして、仕事の不安やミーハー話など、おしゃべりしていました(笑)。先生は黙って聞いてくださっていて。仕事は、大変でしたが楽しくもありました。ただ先輩に30代女性がまったくいないことから、「このままこの仕事を続けていったいどうなるのだろう」と悩み、1年半で退職し、塾の講師をしていました。

――その後、英文コースの助手になられたのですか。

照明の仕事を辞めたことを河本先生にお伝えすると、「助手をしませんか」と声をかけてくださり、助手として5年間勤めさせてもらいました。当時、入江先生、定松先生、高久先生、グリンドン・タウンヒル先生、河本先生、満谷マーガレット先生、沼田先生がいらっしゃいましたが、先生方の知識や教養を間近で吸収できるすばらしい機会をいただきました。また、自分が学生だったときは気づかなかったのですが、共立の学生さんは勉強熱心な子も多く、刺激を受けました。

――その後、現職に?

5年間の任期を終えたあとは、ちょっと休んでから、福音館書店の中途募集の求人に応募し、ちょうど30歳になった2005年10月に入社しました。

――現在の出版社での仕事の魅力、やりがいについてお聞かせください。

所属する宣伝課では、本を広く知ってもらうために何ができるかを編集部、営業部などと話し合い、各著作に合った施策を皆で考えます。かかわった仕事すべてが「子どもたちが本とつながる縁になる」という思いがあるので、手は抜けません。本離れは深刻な問題なので、業界全体でボトムアップを図っていきたいという気持ちで動いています。

――現在、子育て真っ最中とのことですが、両立はどのようにされているのでしょうか。

7歳の女の子と5歳の男の子、2人の子育て中です。まだまだ手はかかりますが、保育園・学童保育・ファミリーサポートなど、いろいろな方の手を借りて何とか毎日がまわっている感じです。

――では最後に、共立の魅力と後輩へのメッセージをお願いします。

じっくりと興味の幅を広げ、好きな勉強をできるところが私には合っていたように思っています。自分が一生楽しめる興味の対象を見つけられればいいですよね。そして、とにかく先生方が知の宝庫なので、在学中は講義を含め、お話を聞く機会を逃がしませんように。

仕事を選ぶにあたっては、「この会社でこの仕事をしたい」というよりは、「自分が仕事を通して社会のために何ができるのだろうか」という視点を持つほうが仕事のモチベーションが持続するような気がしています。環境(結婚や育児)でライフスタイルが変わることの多い女性がまだまだ多い中、組織で働くのは、何かと苦労は多いですが、仕事と社会と自分の接点を意識しながら、自信をもって社会を渡っていってほしいなと思います。

――本日はありがとうございました。

聞き手　高橋京子(1989卒)

Kyoritsu Spirit!

連載 私の学生時代 ―文芸学部で学んだ日々⑱―

my school days

今回は第18期生の望月公惠さんに書いていただきました。

人生後半のワン・ピース

数年前、広瀬修子アナウンサーによる「あしながおじさん」の朗読を聴き、あらためて筋の面白さに気づいた。早速、原書の Jean Webster 著 'Daddy Long Legs' を買って読む。Jean は Mark Twain の姪の娘である。共立女子大学の授業風景が甦ってきた。Mark Twain ご専門の速川浩教授が、授業の端々で、'The Adventures of Huckleberry Finn' の魅力を語られていたのである。今でも時折、原書で読むことがあるのは、先生の熱意によるものだろう。

大学では「発声朗読法」の授業を受けた。女優の加藤道子氏のご指導で発声の大切さを知った。この体験が子育てしながらの公民館での絵本の読み聞かせ、やがて朗読の勉強に進むきっかけとなっている。

学生時代の部活動は ESS である。他校との討論会 (discussion)、討論会 (debate)、演説会 (speech) に何回となく参加した。親となった今、娘が不思議そうに「お母さんは新聞の政治面を読んで解説してくれるけれど、一体、どうしてそんな事ができるの？」と聞いてくる。即座に学生時代に ESS で debate を経験したからだと答えた。一つの事にも必ず賛成、反対の意見があるもの。その意味を調べたり、考えたりした経験が役立っているのである。

懐かしく思い出すのは、ESS の仲間と国会図書館の新聞切抜き室に通い、記事を読み漁り、主張を裏付ける資料を見つけ、共に興奮を分かち合ったことだ。自分達の主張を英訳するにも、稲見さん (旧姓 : 森地さん)、大友さん (旧姓 : 近藤さん)、角谷さん (旧姓 : 根元さん) の英語力を大いにお借りした。政治の専門書を読み込んで味気ない気持ちになっても、頼りになる仲間達がいたから乗り越えられたのだ。

私の人生がジグソーパズルだとしたら、人生後半に手に入れたピースは、大学での授業、部活、そして友情が緒になっていることは確かである。

望月公惠（1974 卒）

広場

◇金澤信子さん (1975 卒) は東京アカデミー合唱団や、共立の OG からなる桜友女声合唱団のメンバーとして活躍しておられますが、昨年 10 月、桜友女声合唱団創立 40 周年記念演奏会に出演されました。

◇永田迪子さん (1962 卒) は蓮の花の美しさに魅せられ研究を続けておられ、昨年 12 月にエッセイと写真集『蓮の玉手箱』を出版されました。

◇伊藤和子さん(1977 卒)は昨年 12 月に小田急新宿本店で「伊藤和子絵画展」を開催されました。

お詫びと訂正

「通信」第 31 号第 1 面、文芸サロン講座の入江和生先生の講演「女と男はこんなにも違う－英米女流作家に学ぶ－」についての記事で、「結婚式はこの世で最も嘆かわしい光景の一つだ」はケイト・ショパンの「一時間の物語」からの引用、と書きましたが、正しくは同じケイト・ショパンの『めざめ』からの引用でした。お詫びして訂正いたします。

(編集部)

掲示板

INFORMATION

◇総会・文芸サロン講座のお知らせ

2020 年度　総会・文芸サロン講座を 6 月 13 日 (土) に開催します。

総　　会　11:00 ～ 12:00

文芸サロン講座13:30 ～ 15:30

講　師：福嶋 伸洋 氏（文芸学部准教授、抒情詩・ブラジル音楽・比較文学）

演　題：

「ボブ・ディラン 'Blowing In The Wind' と
ザ・フォーク・クルセダーズ『イムジン河』―境界を超える歌―」

＊会場は追ってお知らせします。

※ミニバザーを実施する予定です。

品物をご提供くださる方は当日お持ちください。(新品歓迎)

編集後記

EDITOR'S NOTE

＊昨年実施したアンケートの回答をみると、会の継続には難しい面もありますが、存続を望む声があることがわかります。「通信」へのご提案もいただきました。会員相互の交流の「広場」という役割を果たしていけたらと思います。ご投稿やご意見をお待ちしています。＊気づかぬうちに事態が進行していく状況が心配です。新型コロナウイルスによる感染が終息することを切に願っています。(K)